別添４

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究分担者　岩波　明　昭和大学医学部精神医学講座　教授

研究要旨

成人期の心理社会的支援の必要性は高まっている。昭和大学烏山病院では注意欠如多動症（以下、ADHD とする）専門プログラムを実施し、効果をあげているものの、同様の取り組みを行う医療機関は多くない。全国各地で様々な希望があるなか、多くの医療機関で実施可能な汎用性のあるプログラム（汎用プログラム）が求められている。

本研究は、高まる成人期 ADHD の心理社会的支援の必要性に応えるべく、①ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすこと②支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることが出来るようになることを目的に実施された。

R2 年度で実施した現行プログラム参加者に対する調査および現行プログラム実施スタッフに対する調査の結果および協力施設の意見を踏まえ全 5 回、コアプログラム 2 時間で構成される汎用性プログラムと一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアル・映像資料も作成した。汎用プログラムは各施設でプログラムの位置づけや運用方法を工夫することにより、各施設の背景やニーズに合わせて活用することができると考える。また具体的な運営方法を示したマニュアル、映像資料により実行の可能性が高まることが期待できると考えられた。

Ａ．研究目的

青年期・成人期の注意欠如多動症（以下、ADHD）の支援ニーズは高い。しかしながら、薬物治療の効果は限定的であり、ショートケアプログラムなどの心理社会的治療が必要となる。

昭和大学附属烏山病院では、2013 年からは ADHD 専門外来、デイケアにおいて体系化された全 12 回の ADHD 専門プログラム（以下、現行プログラム）を実施し、現在までに 250 名以上が参加している。専門グループの参加により障害特性に対する自己理解が促進され、障害特性の軽減、社会的能力の向上が得られている。その他、情動の安定にも有用であり、QOL の向上が得られている。

全国的にデイケアで発達障害者を受け入れている施設は多いものの発達障害に特化した専門プログラムを実施している施設はごくわずかである（ADHD 専門プログラムを実施している機関は 2%、 n=250：平成 30 年度厚労科研）。当院において一定の治療的な効果(不注意症状・不安の軽減)をあげているが、一般の精神科クリニックやデイケアにおいては、必ずしも容易に実施できるものではないことが推察される。また、成人期の ADHD 支援経験がある者も多くなく、具体的な支援方法やイメージをもてていないことが推察された。高まる成人期 ADHD の心理社会的支援の必要性に応えるべく、一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアルを作成することにより、ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことが可能になる。また支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることが出来るようになる。これらによって多くの ADHD の当事者の社会適応の改善に寄与することが期待できる。

よって、本研究の目的は昭和大学で行われている ADHD 専門プログラム実践を基に、精神科クリニックやデイケアにおいても容易に実施できる汎用性プログラムを開発し、その取り組み易さと効果を複数の協力施設のデイケアにおいて検証し、支援者向けのマニュアルを作成することである。

Ｂ．研究方法

R2 年度で実施した現行プログラム参加者に対する調査および現行プログラム実施スタッフに対する調査の結果および協力施設（ハートクリニック横浜、埼玉医科大学附属病院、市ヶ谷ひもろぎクリニック）の意見も踏まえ汎用性プログラムおよびマニュアル類の作成していく。

プログラムの実施および CSQ-8 J において参加者の満足度および、実施スタッフからのヒアリングを行い最終版の汎用性 ADHD 専門プログラムを完成させていく。

（倫理面への配慮）

本研究は昭和大学附属烏山病院における倫理委員会の承認を得て実施する。

Ｃ．研究結果

1）プログラム作成

時間配分は ADHD の特性や実施機関の都合を考慮し、コアコンテンツを 120 分とし、前後 30 分をウォーミングアップやアフターフォローと位置づけることとした。開始前の時間を設けることで、特性からくる遅刻者の脱落を減らすこととグループの凝集性を高めるために役立つことが期待される。また今後実施を検討する機関も、実施時間の選択範囲が広がる点も考慮している。進めやすさという点においては、全てをディスカッションにはせず、コアコンテンツの前半は医師やコメディカルによる講義、後半をディスカッションとする。参加基準は、言語性

IQ=90 以上、グループを崩さない程度の社会性があることとし、可能な限り参加者の背景（年齢や就労状況）をそろえることが望ましいとした。実施回数も参加者、実施者共に負担のない回数として 5 回とした。

	テーマ
1 回	心理教育（薬物療法、感覚過敏/鈍麻、併存症に関しても含む）/認知行動療法／参加者の困りごとの共有
2 回	不注意
3 回	多動／衝動
4 回	対人関係（ASD 傾向についても含む）
5 回	ストレスコーピング／社会資源／まとめ

2)マニュアル作成

マニュアルには、プログラム開始前の導入の仕方、各回のプログラムの目的、講義、ワークの時間の目安、セリフや良く出される意見なども含めた進行例を示していく。映像資料は、マニュアルを補完するものとし、特にマニュアルだけではイメージがつきにくい場面であるグループ進行やグループ運営の様子、参加者への対応の仕方（話が止められなくなった場合やフラッシュバッグを起こした場合など)、ディスカッション時の意見の整理の仕方や記録(板書)方法を盛り込んだ。資料集は、これまでの原稿プログラムの実践を基にグループ共有された特性への対処法をまとめたものとした。

3) プログラムおよびマニュアルの評価

汎用版 ADHD プログラム参加者の患者満足度は CSQ-8J（8～32 点）は平均 24.0 点であった。また、マニュアル、映像資料に対してスタッフからはマニュアルに教示の仕方があること、プログラムの進め方、終え方、予想される困難さへの対応策が示されていること、映像があることでマニュアルによる文字だけでは伝わりにくいニュアンスや雰囲気が理解できるなどの意見が得られた。

D．考察

汎用性プログラムおよびスタッフマニュアル、プログラムの映像資料を作成した。

現行プログラム参加者のカルテ調査を踏まえると、プログラムを必要としているのは就労者が多かった。短期間で行える点は負担が少なく利用しやすさが求められていると考えられた。また、社会での他者との関わりが多くなることで、ADHD 特性に対する対応の必要性が自覚されていることを示唆しており、内容へ反映させた。参加者への負担だけでなく、施設側の実施しやすさも含め全5回､各回120分とした。前後30分ずつのフォローの時間と120分のコアプログラムからなる構成とすることで、各施設の状況や参加者の背景に合わせ時間を調整できることで汎用性を高めるようにした。

マニュアル、映像資料に対してスタッフからはマニュアルに教示の仕方があること、プログラムの進め方、終え方、予想される困難さへの対応策が示されていること、特に映像があることでマニュアルによる文字だけでは伝わりにくいニュアンスや雰囲気が理解できるなどの意見が得られた。さらに資料集があることで、実施スタッフはディスカッションが停滞した際に事例の１つとして紹介することが出来る。また参加者も手元へおき日々の生活の中で活用することも可能となると考える。これらにより、より多くの施設で取り組み易くなったと考える。

E．結論

成人期の心理社会的支援の必要性は高まってきている。昭和大学烏山病院で効果をあげている ADHD 専門プログラムを様々な規模や地域の医療機関で実施されることを目指し、汎用性のあるプログラム開発に取り組んだ。汎用プログラム開発のための基礎資料を得るために参加者とスタッフを対象にヒアリング及びアンケートを実施した。参加者からは現行プログラムでは不足している内容の希望、スタッフからは経験不足や対応の仕方などについての不安があるため、マニュアルや資料集の整備、参加基準を求めていることが明らかとなった。これらの結果を基に作成した汎用プログラムおよびマニュアルの効果検証を行っていく。

本研究は、ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことと、地域に関係なく均一なサービスを受けることが出来るようになり多くの ADHD の当事者の社会適応の改善に寄与するものと考えられる。

F．健康危険情報

該当なし

G．研究発表

1. 論文

1) Naya N, Sakai C, Okutsu D, Kiguchi R, Fujiwara M, Tsuji T, Iwanami A. Efficacy and safety of guanfacine extended-release in Japanese adults with attention-deficit/hyperactivity disorder: Exploratory post hoc subgroup analyses of a randomized, double-blind, placebo-controlled study. Neuropsychopharmacology Reports. 41(1):26-39,2021.
2) Nakagawa A, Hayashi W, Nishio T, Hanawa Y, Aoyagi K, Okajima Y, Iwanami A. Similarity of subjective symptoms between autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in adults: Preliminary findings. Neuropsychopharmacology Reports. 41(2):237-241,2021.
3) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Pupillometric Complexity and Symmetricity Follow Inverted-U Curves Against Baseline Diameter Due to Crossed Locus Coeruleus Projections to the Edinger-Westphal Nucleus. Frontiers Physiology. 12:614479,2021.
4) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Identification of attention-deficit hyperactivity disorder based on the complexity and symmetricity of pupil diameter. Scientific Reports, 11(1):8439, 2021.
5) Hayashi W, Hanawa Y, Iwami Y, Aoyagi K, Saga N, Nakamura D, Iwanami A. Correction to ASD

symptoms in adults with ADHD: a preliminary study using the ADOS-2. European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience. 272(2):233,2022.

6) 岩波明、林若穂. 発達障害の概念を理解するための仮説　ADHD の病態は明らかとなったか　仮説というファントム. 精神医学の基盤、1：184-195,2021.
7) 岩波明、林若穂、宮保嘉津真. 成人期 ADHD の症状評価スケール. 精神科 38(3)：324-331,2021.
8) 水野健、五十嵐美紀、横井英樹. 成人期 ADHD を対象とした心理社会的プログラム. 臨床精神医学、50(5):447-453,2021.
9) 小島睦、中村暖、林若穂、宇野宏光、花輪洋一、笹森大貴、太田晴久、岩波明. 気分障害患者における自閉症スペクトラム指数(AQ)、コナーズ成人 ADHD 評価スケール(CAARS)の得点傾向と解釈. 昭和学士会雑誌、81(3):259-265,2021.
10) 澤登洋輔、髙塩理、橋本龍一郎、林若穂、小島睦、小野英里子、西尾崇志、青柳啓介、太田晴久、板橋貴史、岩波明. 自閉症スペクトラム障害における社交不安の神経解剖学的相関：Voxel-Based Morphometry を用いた予備的研究. 昭和学士会雑誌、81(3):229-241,2021.
11) 中村善文、太田晴久、西尾崇志、土岐幸生、石部穣、林若穂、傅佳慧、加藤進昌、岩波明. 成人発達障害専門外来における診断名および自己記入式評価尺度の検討. 精神医学、63(10):1555-1567,2021.
12) 岩波明. 発達障害はなぜ誤診されるのか. 新潮選書、2021.

2. 学会発表

1) 花輪洋一、林若穂、岩見有里子、青柳啓介、佐賀信之、中村暖、岩波明. 成人期 ASD と ADHD における ADOS-2 の検討. 第 117 回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21
2) 中村暖. 成人期の ASD と ADHD～診断、治療における共通点と相違点について～　成人期の ASD と ADHD 診断、治療における共通点と相違点について. 第 117 回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21
3) 山田真理、太田晴久、久保浩明、香月亮子、加藤隆弘、加藤進昌、岩波明. 自閉症スペクトラムにおけるひきこもりの生物心理社会的な共通基盤の解明. 第 117 回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし

2. 実用新案登録
該当なし

3. その他
該当なし